
「教材研究の友」発刊にあたって

学校教育室学力授業力向上担当 下町壽男

我々が、様々な場面で岩手の学力の課題について話をすると、「大変な実態であることはわかった。では、どうすればいいのか。授業のどこをどう変えればいいのか。県として具体的に示して欲しい」という声が寄せられる。

そのような質問は、ワンセンテンスで即答できるようなものではないし、教師にはそれぞれ個性や持ち味があるわけで、それを否定して一つのやり方を押し付けるというのもどうかと思う。

また、学力問題は授業だけでなく、経済問題や教育政策、学習環境などの問題にもメスを入れなければ解決できない側面もある。

しかし、そういつて突き放すのはあまりにも無責任なので、学力授業力向上担当の立場として、これまでの経験で感じたことをもとに、2つほど述べたいと思う。

一つは、授業とは、その先生の学識や教材研究の成果、経験などの集積によって行われるということである。であれば、まず、数学の教師としての教科指導力を磨くことなしに、授業技術を云々することはできないのではないかと考える。

2011年の8月に、元厨川中学校校長で、現在岩手大学教員機構におられる田中吉兵衛先生のお話を伺う機会があった。先生によると「今、現職教員に不足しているのは、教養、特に教科専門科目教養である」「教科専門教養によって子どもたちの知的好奇心は導かれる」「数値に表れるだけの学力、その学力を高めるためだけの、誰でもすぐ使える授業技術を追い求める教員が多くなっている」との指摘があった。私は、この考えに強く共感した。

「板書」「発問」「生徒を動かす」など、授業技術は一生懸命だが、教材観がなく数学的中身が空虚な授業や、先生が数学を好きだとはとても思えないような授業に出会うと、気が滅入ってしまう。

また、数学の面白さや、深い内容を読解するた

め知恵を絞ること、教材を発展的に考えることには興味がなく、数値で現れる模試のSSや、授業をいかに破綻無く生徒をコントロールするかということに腐心している授業もそうである。

数学教師はもっと教材研究を深めるべきだ。1人だけでなく、仲間と一緒に研究する機会も作って欲しい。これが学力向上を果たすための一つの提言である。

二つ目は、数学的活動に絡んだ話である。指導要領には「**数学的活動とは、試行錯誤したり、資料を収集整理したり、観察したり、操作することなどの活動も含まれ得るが、教師の説明を一方的に聞くだけの学習や、単なる計算練習を行うだけの学習などは含まれない**」と述べられている。つまり、逆に言うと、「**数学的活動**」が今ことさら取りざたされるのは、「**教師の説明を一時的に聞くだけの学習や、単なる計算練習を行う**」だけの「憂うべき」学習が蔓延していることに対する警鐘と見ることもできると思う。

学力向上のためにどうすればよいか。それは、教師が一時的にしゃべり、**生徒の考える楽しさ＝数学の良さ**、を奪うような授業をやらないこと。これが二つ目の提言である。

この冊子は、平成23年度の個別訪問を行った先生方に、事後に配布した「所感」から55人分を抜粋してまとめたものである。「所感」では、授業の巧拙などではなく、純粋に教材研究資料となる内容のものに限定して、個々の先生方に異なる内容のコメントをメール配信してきた。

時間的な余裕がない中で作成したので、間違い等もあるかもしれない。ご容赦いただきたい。

また、いろいろな書物等からの引用もあるので、この冊子の利用は、あくまで個人の教材研究用に留めて活用いただきたい。

最後に、個別訪問で授業を行ってくださった先生方に感謝を申し上げるとともに、この冊子が教材研究に少しでも役立つことを願いつつ、発刊にあたっての挨拶としたい。

2012年2月24日